今週の為替相場見通し（2023年10月23日）

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	（円）		148.75 ～ 150.00	149.87	148.00 ～ 151.50
ユーロ	（ドル）		1.0504 ～ 1.0617	1.0595	1.0450 ～ 1.0650
（1ユーロ=）	（円）		157.19 ～ 158.90	158.72	157.00 ～ 159.50
英ポンド	（ドル）		1.2093 ～ 1.2219	1.2165	1.1900 ～ 1.2400
（1英ポンド=）	（円）	*	181.11 ～ 182.81	182.29	179.00 ～ 184.00
豪ドル	（ドル）		0.6296 ～ 0.6393	0.6314	0.6270 ～ 0.6420
（1豪ドル=）	（円）	*	94.06 ～ 95.67	94.62	94.00 ～ 95.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　為替営業第二チーム　大野　梨紗

（1）今週の予想レンジ：　148.00 ～ 151.50 円

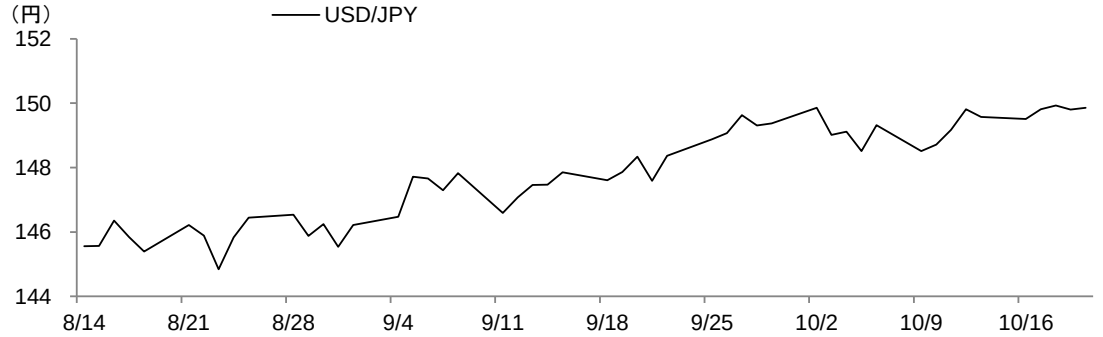
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、2週間ぶりに一時150円台に乗せる展開となった。週初16日、149.55円でオープンしたドル/円は、一日を通じて149円台半ばを中心としたレンジ推移。17日の海外時間では、日銀が今月末の会合で来年度にかけての物価見通しを上方修正するとの報道を受け、一時週安値の148.75円に急落。しかしその後、米9月小売売上高の強い結果を受けた米金利続伸も相まって、150円を目指す展開に。18日、ドル/円は下に往って来い。海外時間は、米金利が騰勢を強める中で、150円手前まで上昇。19 日、ドル/円は149円台後半でじり安推移。海外時間は、パウエルFRB議長会見を控える中、警戒感からドル買いとなり一時149.94円に上昇も、値を戻して引けた。20日、ドル/ 円は引き続き149円台後半を中心とした狭いレンジ推移が継続。海外時間に入り、前日のパウエルFRB議長会見での発言を受け、米金融引き締め長期化の見方が広がり、日米金利差が拡大したことで円安が進行。ドル/円は一時週高値となる150円ちょうどをつけた。しかしその直後149.60円まで下落。その後は押し戻され、149.87円でクローズした。

今週のドル/円は、ドル高円安トレンドが一段と強まる展開になるものと予想する。米国における足許の堅調な経済指標は、国内経済が高金利下においても力強さを維持していることを示している。直近で発表された米雇用統計、米PPI、米CPI、米小売売上高は軒並み市場予想を上回る強い結果となっており、パウエルFRB議長からも金融引き締め継続姿勢が示されたことで、米10年債利回りは2007年7月以来の高水準となる5.00％手前へ急上昇した。また本邦においては先週、植田日銀総裁より粘り強く金融緩和を継続する方針が発表された。今月末に予定されている日銀金融政策決定会合で展望レポートの上方修正や金融緩和の一部修正を警戒する声が高まっているものの、例え金融緩和の修正に踏み切ったとしても、日米金利差は歴然であるため、円買いに転じるシナリオは考えにくい。こうした日米金融政策の違いが意識されることでドル/円の上昇トレンドは支えられるものとみる。今週はブラックアウト期間に入ることから、要人発言への警戒は不要であるものの、26日（木）に米7～9月期GDP（速報）、27日（金）には米9月個人消費支出デフレーターが公表予定となっている。これらの指標結果が市場予想を上回る（インフレ抑制効果は見えない結果の）場合には、堅調な米経済指標→米国のインフレリスク→年内追加利上げ観測再燃→米金利上昇→米ドル買いの展開が予想されることから、今週のドル/円は週後半にかけてのアップサイドリスクに警戒したい。

（3）先週までの相場の推移

先週（10/16～10/20）の値動き：　安値 148.75 円　高値 150.00 円　終値 149.87 円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

金融市場部　為替営業第二チーム　松永　裕司

(1)今週の予想レンジ:　1.0450　～　1.0650　　157.00　～　159.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

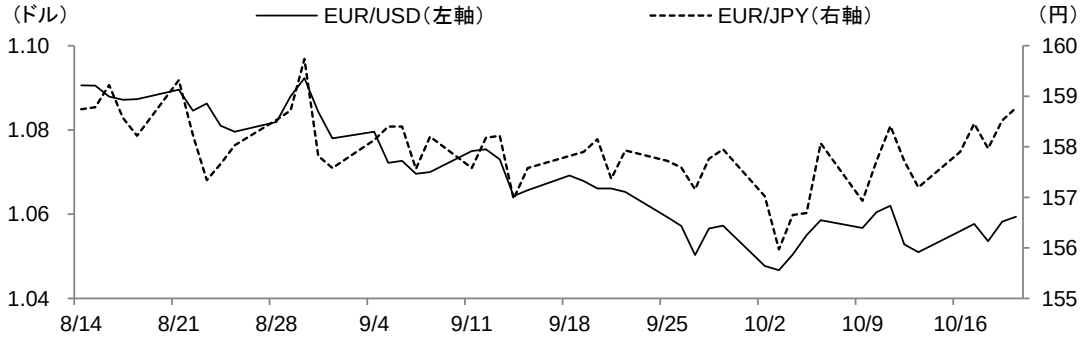
先週のユーロ/ドルは、パウエルFRB議長の発言を受けた米短期金利低下を背景に、一時1.06台を回復した。週初16日、1.0521でオープンしたユーロ/ドルは、リスクオフ後退に伴う欧州株高や独金利上昇を背景に、1.05台半ばに上昇した。17日、独10月ZEW景気期待指数の市場予想を上回る結果を受けた独金利上昇を横目に、1.06手前に上昇した。18日、中東情勢悪化懸念を受けた欧州株安や、米金利上昇を受け1.05台前半に下落した。19日、パウエルFRB議長が追加利上げに対し強い示唆を行わなかったことが好感され、米短期金利が低下する流れに合わせ、一時週高値となる1.0617に上昇した。20日、目立った材料がない中1.05台後半で小動き。米長期金利の上昇一服を受け、ユーロを買い戻す動きから一時1.06台を回復する場面も見られたが、株式市場の軟調な推移もあり上値は重く1.0595で越週。

今週のユーロは対ドルで上値の重い展開を予想する。米国対比軟調な欧州経済や中東情勢の混乱を受けたセンチメントの悪化や原油高がユーロの上値を抑えよう。欧州では26日(木)のECB政策理事会が注目される。前回9月会合では+25bpの利上げを決定したものの、声明文では今後の利上げ打止めを示唆する内容となった。足許で欧州のインフレは鈍化の兆しが見られることや、欧州の景気下振れリスクが警戒される中、今回会合は政策金利据え置きとの見方が強い。一方で中東情勢の混乱も一因に冬の需要期を前にエネルギー価格の上昇が見られることもあり、引き続きインフレへの警戒は維持されよう。今後の金融政策は引き続きデータ次第となると見られ、為替市場への影響も限られよう。その他、欧州では24日(火)にユーロ10月製造業/非製造業PMIや25日(水)に独10月IFO企業景況感指数が公表予定。低調な結果となれば欧州のスタグフレーション懸念からユーロ安が進む可能性もあり警戒したい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/16～10/20)の値動き:　(対ドル)　安値　1.0504　高値　1.0617　終値　1.0595

(対円)　安値　157.19　高値　158.90　終値　158.72



(資料)ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　中島　將行

(1)今週の予想レンジ:　1.1900　～　1.2400　　179.00　～　184.00　円

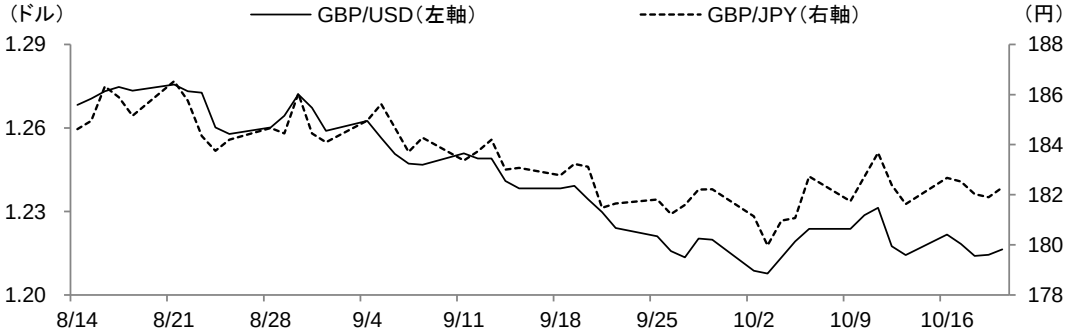
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のポンド相場は対ドル1.21から1.22の間でほぼ横ばいの展開となった。また、ドル/円が150円を手前に介入警戒感から動意の乏しい展開となったことを受け、ポンド/円も182円を中心とする狭いレンジでの推移となった。先週は、2022年以降のトレンドとなっている米金利上昇・ドル高の流れと比較してややイレギュラーな動きとなっている。先々週発表の米9月分CPIに続き、先週1週間は17日公表の米9月小売売上高が堅調な結果となったことや、米財政政策を巡る不透明感もあり、米長期金利は19日から20日にかけて節目となる5.0%手前まで上昇した。一方、米長期金利の上昇に対し、ドル高の勢いは鈍く、スイスフランを筆頭に、対ドルで上昇する通貨もあった。米長期金利が節目の水準に近づくにつれ、米金融環境の逼迫など、高金利による実体経済への下押し圧力がより強く意識されている面もあるだろう。英国の経済指標では、17日に労働市場関連統計、18日には9月CPIが発表された。2023年6～8月の週間平均賃金上昇率(ボーナス除く)は、前年比+7.8%と前回分の同+7.9%から若干伸びは鈍化し、市場予想と一致した。伸び鈍化は1月以来となる。一方、9月CPIは前年同月比+6.7%と8月から横ばいとなり、同+6.6%への減速を見込んでいた市場予想を上回った。寄与度を見ると、国際価格の上昇を背景にエネルギー価格が再び高まったほか、サービス価格がCPIをやや押し上げた格好となっている。イングランド銀行(BOE)のベイリー総裁は10月20日の講演において、インフレ率を目標水準まで引き下げるには賃金の伸びがまだ大きすぎるとの認識を示している。総じて、一連の経済指標は11月2日に控えるBOEの次回金融政策決定会合での据え置き観測に変化を及ぼすほどのものではない一方で、BOEが長期間、政策金利を高水準で維持することを支持する内容であった。

今週1週間のポンド相場は、膠着した展開を予想している。引き続き、中東情勢の緊迫化や米国金融市場を睨んだ展開となろう。中東情勢については、イスラエルとイスラム武装組織ハマスの軍事衝突がエスカレートして中東の他地域にも広がるのではないかとの懸念が強まっている。リスク回避のドル買いや、エネルギー価格高騰に伴う英国を含む欧州経済の悪化リスクを考慮すれば、ポンドにとって下押し要因であろう。一方、節目の5.0%の水準に達しようとしている米長期金利の動向も重要である。中東情勢の緊迫化や、米金融環境逼迫への懸念に伴うリスクオフを背景に、米国債が上昇(利回りは下落)する場面も時折見られるが、トレンドとして米長期金利が上昇を続ける流れは変わっていない。ただし、米長期金利の上昇に対し、ドル高の流れが鈍っていることは、それだけ米金融環境の逼迫など、高金利による米実体経済への下押し圧力がより強く意識されている面もあるだろう。「欧州や中国と比較して圧倒的に底堅い米国経済」という見方を背景にドル買いが進む流れには変化が訪れつつあるように思われる。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/16～10/20)の値動き:　(対ドル)　安値　1.2093　高値　1.2219　終値　1.2165
(対円)　安値　181.11　高値　182.81　終値　182.29



(資料)ブルームバーグ

4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部　シドニー室　安藤　愛

(1)今週の予想レンジ:　0.6270　～ 0.6420　　94.00　～　95.50　円

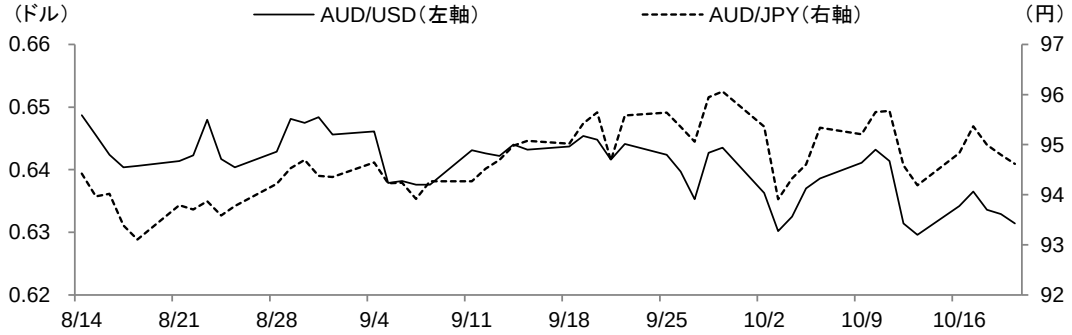
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.64手前まで上昇後、再び0.63台前半まで下落。16日、イスラエルとハマスの紛争収束を目指して主要国が外交努力を続ける中、金融市場は落ち着きを取り戻し、株価は上昇反転。逃避買いの巻き戻しからドル売りが強まると、豪ドルは0.6340近辺まで上昇。17日、この日発表されたRBA議事要旨では前回の会合にて利上げが検討されたことが判明。インフレの上振れリスクが大きな懸念材料であるとし、今後のデータ次第では11月会合で追加利上げする可能性を示唆した。NY時間に入り発表された米9月小売売上高が大幅に上振れたことで、米金利が大きく上昇するとドルは買いで反応。豪ドルは一旦売られたがすぐに買い戻され0.6365近辺で引け。18日、中国7～9月期GDPが予想を上回ったことを受けて人民元が買いで反応すると豪ドルも連れ高に。一週間ぶり高値0.6393まで上昇したものの、買い一巡後は反落。米9月住宅着工件数が2か月ぶりに増加したことを受けて米金利が上昇幅を拡大し米10年国債利回りが16年3か月ぶり高水準を付ける中、ドル高が強まり、豪ドルの重しとなった。19日、豪9月雇用統計で正規雇用者数が減少したことを受けて売りの反応となり一時0.63割れまで低下。その後上昇に反転してじりじりと買い戻された。注目されたパウエルFRB議長による講演では、「FOMCは不確実性とリスク、そしてこれまで実施してきた措置を踏まえ、慎重に進めている」と発言したことを受けて、次回FOMCでの利上げ期待が大きく後退。短期債利回りとともにドルが下がると、豪ドルは下落幅を縮小し0.6330近辺で引けた。20日、豪債利回り上昇が一服する中、小安く推移。欧米時間にかけて中東情勢を巡る懸念からリスクオフの流れとなり、株価が下落幅を拡大すると豪ドルも頭を押さえられ0.6310近辺まで下落して越週。

今週はは25日(水)豪7～9月期消費者物価指数(CPI)、26日(木)ブロックRBA総裁議会証言、ECB政策理事会、米7～9月期GDPなどが注目材料。8月の豪月次CPIインディケーターは前月比伸びが加速する結果となり、今回の豪7～9月期CPIでも前期比ベースで伸びが上振れることが予想されている。10月RBAの議事要旨には「インフレ目標回帰が現在の予想より遅れることに対する理事会の許容度は低い」とあり、RBAが8月の四半期報告書発表時点で予測した12月末時点でのインフレ率4.1%に対して、豪7～9月期CPIが想定ほど鈍化していなかった場合は、追加利上げ観測が強まることが予想される。イスラエルとハマスを巡る中東情勢は不透明感が増しており、リスクオフの流れが豪ドルの頭を押さえている。新たなヘッドライン次第で急速にリスクオフが進む可能性がある為、引き続き地政学リスクには注意を払いたい。

(3)先週までの相場の推移

先週(10/16～10/20)の値動き:



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。